

# 組合士 アラカルト

神奈川県種苗協同組合

横山 よこやま

陽江さん はるえ

## 時間をかけて培われてきた組合の信頼関係をバトントッチしていくために

「その時できることは精一杯努力する。そうすれば必ずその努力は身に付く。これを人生のポリシーにしています」。こう語る神奈川県種苗協同組合の横山陽江さんは、その言葉どおり、バイタリテイに溢れた女性である。そして、この信念に基づいて趣味の世界から仕事の世界までさまざまな資格取得や活動に取り組み、それを大いに活かし楽しんできているとも言う。中小企業組合士という資格、仕事ももちろんその一つ。同組合への奉職12年目の現在は、持ち前の明るさと活力で「組合のしつかり母さん」のような存在となっていると見受けられる。

### ヤリかぐ仲の53組合

昭和39年に設立された同組合は神奈川県内の種苗卸問屋（いわゆる「種屋さん」）36社が集まっている。組合の第一の目的・活動は「県内農家に必要とされる野菜の種を滞りなく供給すること」であり、組合は種苗メーカーから種を購入してそれらを組合員や、全農神奈川県本部（JA全農かながわ）、県内各農協へ卸している。さらに、組合は他府県からの種の仕入れもできるので、流通のいい種や人気の高い種を組合員が入手しやすくなっている。もう一つ、組合では共同

事業として県の試験機関が育成した種苗を県内農家に供給し広めるという役割も担っている。また、これらの種苗取扱の収益と組合保有の不動産（テナント、駐車場賃貸）収益とで組合の運営費をすべてまかなっているほどの健全財政ぶりである。

しかし、何よりも同組合を特徴づけているのは「組合員の仲のよさ、信頼関係」だと横山さんは言う。組合員同士はもともと地元で2代3代と事業を引き継いできた。さらに、組合とは別に任意団体として青年部が組織され、組合の理事・役員は20代30代からの仲間たちである。そういう地縁と歴史を共有している信頼関係が根強く息づいているのである。

この信頼関係は組合員間だけのものではなく、組合員と事務局の間にも強く存在している。「時には、若手組合員へ昔からの経緯も含めて組合のことを話して把握させてほしいと理事さんから頼まれることもあります。その一方で、事務局だけでは対応できない課題も理事さん、特に長老格の役員さんに相談すれば必ず円満解決ができます」と横山さんは言う。組合員相互はもちろん、組合員と事務局も一心同体の信頼関係でつながっているのである。

### 若手職員、女性職員にこそ活躍を期待して

事務局は現在、事務局長以下3名で運営しているが、横山さんはその中で一番のベテランである。経理業務がメインの担当であるが、実際には「よろず担当」と言ってもよく、組合員を始め、JA、テナントとそれらが所属する地元商店会など、人と接する機会が非常に多い。その中で「とにかく顔の見える付き合いを大切にしている」と言う。

そんな横山さんが組合士になったのは平成19年と比較的最近である。「そもそも組合士という資格を知らなかったし、耳にすることはあっても何のことかわからなかったから」だと言う。しかし、何事も全力投球で挑戦することがモットーの横山さんは、ひとたび組合士の資格を知るとさっそく勉強して取得したのでそうだ。

組合士になってみると、他組合の職員との付き合いも広がり、いろいろ気づくことがあるという。一つは、「うちの組合は本当に特別なんだな」と、改めて組合員・理事同士、そして事務局との信頼と結びつきの強さを実感するそうだ。もう一つは、「組合士は特に実務の中



核を担う40代50代の職員にもっと取得してほしい」ということ。たとえば組合特有の会計や税制の仕事は実務者、中でも女性職員が担うことが多いだけに「女性職員にもっと組合士に目を向けてもらえようになつたら」と強く感じているそう。正直に言えば、組合はまだまだ男社会です。男性なら1の努力で認められることも女性は10の努力をしてやっとスタートラインということも多い。けれど、それならその努力をして認めさせればいいし、それだけの能力が女性にはあります」と横山さんは自分自身の経験も含めて指摘する。

同組合では昨年、35年ぶりに新卒男性職員を採用したが、「今現在、うちの組合がこれだけ信頼が厚く、なおかつ、健全財政で運営できているのは一にも二にも組合草創期の役員・事務局長の先見の明とそれを着実にする施策があったからです。こういうことを少しずつ、若い彼に伝え、理解してもらいながら、彼なりの組合運営、仕事の仕方を覚えていってほしい」と横山さん。「私もやがて世代交代です。その時、適材適所でこの組合のよさが続くよう準備を整える。そのためにできることから努力するのみです」